

日本語研修コース修了生の追跡調査

—非漢字圏学習者のケーススタディー—

下平 菜穂・金子 泰子・佐藤 友則
中村 純子・合津 美穂

キーワード : 教員研修生、中級学習者、専門領域の日本語、非漢字圏学習者、漢字と語彙の教育

要旨

信州大学留学生センターでは1999年10月より日本語研修コースをスタートしたが、コースを改善していくためには、修了生の追跡調査を行い、その置かれている状況を知ってニーズを把握することが必要である。本調査では、研修コースを修了した非漢字圏の中級レベルの学習者へのインタビューを実施し、現在置かれている状況とその問題点を調査した。その結果、生活言語に特に支障のない中級学習者の、専門領域での日本語能力の不足が、学習や研究に困難をもたらしている例が明らかにされた。特に非漢字圏から来たために、漢字や語彙の知識の不足から困難を感じている様子が見えてきた。

1. はじめに

信州大学留学生センターでは、1999年10月に2名の留学生を迎えて、第1期の日本語研修コースをスタートさせた。その後、第2期に8名、第3期に10名の留学生を受け入れて現在に至っている。日本語研修コースとは、大学院入学前日本語予備教育を指し、大学院に進学予定の研究生と教員研修生を対象に、半年間の日本語の集中教育を行うコースのことである。

1999年10月期に在籍した2名は、ともに教員研修生であった。大学院に進学予定の研究生の多くが自国でも学生であったのに対し、教員研修生の多くは自国では教師である。そのため、研究活動に対する適応性や、短い滞日期間における日本語ニーズなど、研究生とはいくつかの点で異なっている可能性がある。

本調査は、信州大学留学生センターの日本語研修コースを修了した教員研修生の、現在置かれている状況を把握することと日本語研修コースに対する評価を得ることを目的としている。本稿は、本調査結果の中から、非漢字圏から来た一人の修了生が現在置かれている状況をケーススタディーとしてまとめ、考察を加えたものである。

また、この調査は、第2期、第3期の修了生に対する追跡調査を実施していく上での、パイロット調査としての性格も担っている。今回の調査を実施することで明らかになった

調査上の問題点等を修正した上で、将来的には、日本語研修コースの全修了生に対して継続的に追跡調査を行い、研修コースの質的向上のための資料としていきたい。

2. 調査の概要

2-1. 調査対象者

本調査の対象者は、ブラジルから来日した教員研修生（以後Aと呼ぶ）である。30代前半の女性で、自国で幼稚園の教育経験を持つ教師である。

Aは、今回の来日の1年前にも山梨県の交流員として10カ月滞日し、1ヵ月の日本語学習の後、教育委員会で研修を受けている。その後、自国へ帰ってからも週1回程度プライベートレッスンを受け、日本語学習を続けていた。したがって、初級の文法事項はある程度習得しており、コミュニケーションの面では中級程度のタスクの中にも達成できるものもあった。1999年10月に来日し、半年間の日本語研修コースに参加した。

日本語研修コースでは、主に構造シラバスに基づいた授業が行われ、午前中の授業では『みんなの日本語 I・II』が教科書として使用された。午後は漢字学習や総合的な学習、チュートリアルに当てられた。漢字学習では『BASIC KANJI BOOK』を使って授業が進められ、半年間におよそ300の漢字が扱われた。また、コースの最後にはプロジェクトワークなど運用に力を入れたいくつかの活動が行われた。

半年間の研修コースの間、Aは非常にモチベーションが高く熱心で、日本語能力の伸びも大きかった。その後、2000年3月に研修コースを修了し、他大学の教育学部に所属することになったが、その時点で、日常のコミュニケーションに特に支障がない程度に会話ができ、簡単な手紙等が書けた。研修コースを受講して大学院に進学する一般的な学習者と比較して、Aは既習の上に進歩も大きかったため、日本語能力は相当に高かったと言える。

2000年4月より、Aは教育心理学を研究している。なお、1年間の研修の後に帰国する大方の教員研修生と異なり、大学院の修士課程への進学を予定している。

2-2. 調査方法

調査は、学習者が現在置かれている状況を把握することを目的とし、インタビューによって行われた。調査時期は、日本語研修コースが終わって大学での研修が7カ月ほど経過した11月初旬であった。Aに対するインタビューは、執筆者の1人、下平がAの学ぶ大学の図書館に赴き、対面形式で実施した。インタビューは1時間ほどかかった¹⁾。下平は、日本語研修コースにおいてAの日本語教育を担当していた。よって、学習者と信頼関係が築かれていたと推測できるが、教師以外の利害関係のないインタビューアーに対する時とは違う回答が引き出されてしまった可能性は否定できない。

インタビューは、半構造化インタビュー（semi-structured interview）とした。これは、ある程度まで調査項目を標準化して今後の調査のための資料を得るとともに、学習者の体験や考えに沿ってインタビューを柔軟に進めることにより、学習者の置かれた状況を

より実態に即した形で把握することを目的としている。質問は、学習に関する項目と、生活や人間関係に関する項目²⁾ について行った。質問項目は、守山他(2000)、佐藤(1999)、広島大学留学生センター(1993)などを参考に決定した。なお、今回の調査をもとに、第2期以降の修了生に対しては、アンケートとインタビューを併用した調査を予定している。

3. インタビュー結果

(以下は、インタビューでの話し方にもとづいた学習者の視点からの記述を、調査項目に沿って再構成したものである。)

3-1. 学習および研究生活

3-1-1. 講義やゼミなどの授業について

次年度に修士課程に進むことを目標として、学部生のための教育心理の授業に出席している。授業はすべて講義。前期は発達心理、教育心理など四つの講義に出席した。後期は児童心理などの講義に出ている。講義ではプリントが配られる。分かるようになりたいので、聞きながらメモを取っている。

3-1-2. 日本人学生との待遇の違い

同じ授業に出ている学生は、自分以外はほとんど日本人で、留学生もいるが中国人で漢字が読めるので、ふりがなを振ったりゆっくり話したりということは特にされていない。一度、ある先生がプリントにかなを振ってくれた。ふりがなを振ったりゆっくり話したりしてもらえれば、自分にとってはいいだろうと思うが、一人だけのためにそうしてもらうのは先生方や他の学生に悪いだろう。

レポート等は提出しなくてもよいことになっているが、修士課程へ進んでからレポート等を書く必要があると思うので、自主的にレポートを提出した。修士課程1年のチューターがいて、レポートの日本語をチェックしてくれた。後期は、修士課程でやっていくための練習として試験も受けたい。

3-1-3. 授業やゼミでの聞き取り

専門についてはすでに自国で学習してある。だから既知のことについては母語で知っていることと結びつけて理解できる。例えば、ピアジェという名が出てくれば、彼が何を主張したかは分かっているので、先生が何を話しているか推測できる。今しているのは、そのような母語と日本語の結びつけ。

しかし、全然知らないことについては、聞いても分かりにくい。友達と話したり先生と一対一で話したりする時には問題ないが、授業になると分からない。日常会話ならできるが、専門用語はあまり分からないから、授業の時に分からないことは多い。先生や友人は、自分のことを日本語が上手だというのが。最初は10%くらいしか分からなかった。今は50%くらい分かる。

3-1-4. 日本語の読みと漢字

講義で読むものは、本もあるがほとんどがプリント。講義で配られるプリントはあまり

読めないで、授業で隣に座った友人にふりがなを振ってもらい、週に一回プライベートレッスンを頼んでいる先生と一緒に訳してもらう。授業後に時間があれば、同じ授業に出ている友達みんながふりがなをつけたり説明したりしてくれる。あとは家や図書館で自分で調べる。

それでも、一番困っているのは読むこと。中国人の留学生は最初はあまりできなかったが、漢字が分かるので、今では自分よりよく読めるようになった。

プリントで困ることは、コピーの細かい所がはっきりしないために漢字の画数が分からず、辞書で調べることができないこと。特に、コピーがよくないと、誰かに読んでもらわなければならない。コピーでも本でも新聞でも、小さい字で線がくっついていると画数が分からない。先生方が黒板に書く字も、くずして書くので分からない。黒板の字そのままの形をノートに写して後で辞書を引こうと思っても、それでは辞書が引けない。

漢字は難しい。自分にとって漢字は、字というより絵のようだ。

カタカナ語も難しい。知らない人の名前などが出てくると、英語等でどう書くのか分からない。授業などでカタカナ語が出てきた場合には、先生に後で聞く。

3-1-5. レポートの作成

日本語で何というか分からない言葉を辞書で調べて使うと、その言葉はそのように使わないと言われる。意味はあっても、その時には使わないと言われる。母語を日本語にただ翻訳しただけでは、適切な日本語にならない。自分には書く練習が必要だし、論文の表現も勉強する必要がある。

レポートは提出する義務はなかったが、二つ、自分から書いて提出した。しかし、フィードバックをもらわなかったので、どこが間違っているかは分からない。書くことは大変で、緊張する。自分は、話す時は日本語で考えるが、書く時は母語で考えてから日本語に訳している。その後、チューターが日本語をチェックしてくれる。

3-1-6. 授業での発表

一度、授業で発表する機会があった。友達にチェックしてもらって発表した。原稿を読むというやり方ではなく、自分の言葉で話した。自分にとっては原稿を読むよりも、話すことをよく理解して、練習しておいて話すほうが簡単だ。子供と文化について、日本にいるブラジル人の子供達のことを取り上げて話した。日本人はいつも褒めるので、その時も褒められたが、うまくいったかどうかは分からない。発表では特に困ったことはなかった。質問等で分からないことがあっても、聞き返せばいいから困らない。

3-1-7. 日本語の学習

週一回、留学生の日本語の授業があり、参加している。一クラスだけなので、いろんなレベルの学生と一緒に勉強している。テキストは『みんなの日本語』が使われている。

もっと文法的なことを勉強する、様々なレベルの学生がいるクラスも週一回あって、それにも参加している。そこでは助詞の「は」の使い方を学んでいる。上記の『みんなの日本語』のクラスだけでは少ないと思い、この授業も受けることにした。自分には難しすぎ

て理解できないが、論文に書くような表現が必要なのでこの授業にも出ている。この授業のテキストも注文したが、それは助詞の「は」だけについての本のようなのだ。

その他に、自分でプライベートの先生を週一回お願いして、お金を払って教えてもらっている。友達が先生を探してくれた。最初は、修士過程に進むために日本語能力試験を受ける必要があると思い、その勉強のためにプライベートレッスンを始めたが、試験の勉強は難しすぎたので、新聞など自分が読みたいものを読んだりしている。

結局、能力試験を受けなくても修士課程に進めることになったが、能力試験は受けてみたい。漢字2000字というのは大変だし、グラフの読みや聴解なども難しいと思う。漢字は、今いくつ分かるか自分でも分からないが、見て分かる漢字は多いと思う。修士課程進学のための試験の時、漢字を一生懸命勉強したので、前より分かるようになった。でも、漢字を書くほうは難しい。

テレビのニュースを見たりしているが、あまり分からない。映画やドラマも見る。週一回、演歌の歌番組があるが、歌詞が字幕で出るし、演歌はゆっくりだから分かるので、漢字が覚えられる。漫画を読むと覚えられると聞いたが、自分は漫画は好きではない。演歌は好きなので利用している。

また、だんだん、自分の日本語が間違っている時にモニターして分かるようになってきた。でも、間違っていることには自分で気づくが、正しい形が何かということまでは分からない。以前はそのように気づくことがなかった。間違っているかもしれないと気づいたら、誰かと話している時だったら、相手に大丈夫か聞いてみる。面白いことに、一人で考えている時も日本語で考えていることがあって、その時にも間違っていると気づいたりする。そのままにしてしまうこともあるが、重要そうなことだったら、辞書で調べたり、メモしておいて後で誰かに聞いたりする。

大学の日本語の授業では、留学生が多いので、日本語の先生は一人ひとりをケアするのが難しい。だから今は、研修コースの頃と比べて足踏みしている気がする。プライベートの先生とは、今は授業のプリントや新聞などを一緒に読んでもらっているが、大学が休みになったらもっと日本語の勉強をしたい。4月から修士課程でレポートや論文も書かなければならないから、どうすればいいか心配に思っている。一生懸命頑張りたい。

3-2. 日常生活と人間関係

3-2-1. まわりの人とのコミュニケーション

ほとんどの人とは日本語で話している。ある英語圏の留学生など、相手は英語で話して自分は日本語で答える、という相手もいるが、それ以外の人とは日本語。日本語を話す、たとえばお巡りさんのことをヒマワリさんと言ってしまったなど、時々間違いもあるが、困ることはない。先生とも学生とも問題はない。誰とでもよく話す。バスの中で会ったおばあさんと話したりするのもいい勉強になる。

敬語は緊張するのであまり使わない。「ご覧になる」「召し上がる」「いらっしゃる」等の表現は使うが、先生もそんなに丁寧に話さなくていいと言ってくれる。敬語を使って日

本語がよくできると思われて、間違えたら失礼だと思われてしまうが、敬語を使わなければ間違っても大丈夫だと思う。

中南米から来た子供達の勉強を見てあげるボランティアを小学校でしているが、子供たちはポルトガル語やスペイン語、先生方とは日本語で話す³⁾。専門的な言葉は分からないこともあるが、辞書を持って行くし、メモして家で調べることもある。ある南米から来た外国人の家族が、子供を入れる保育園を探す時には通訳をしてあげた。

友達を作ることは得意だ。なぜか分からないが、日本語研修コースの頃は留学生センターの人達や先生から紹介してもらった人、大家さん等、限られた人達しか知らなかった。それに比べて今は、大学内のいろいろな所で人と知りあう。だから友人は多い。

ただ、授業以外にも一緒に遊ぶような友達は多くない。日本人とはあまり遊びに行かないので、いつも留学生の友達と出かけている。日本人はみんなアルバイトなどして忙しいようだ。遊びに行かないのか聞いてみたら、暇な時は家にいたりデパートに行ったりするのだという。日本人同士でもあまり遊びに行かないようだ。

他の留学生が日本語が分からない時には助けてあげる。留学生係の人は、新しい留学生が来ると、日本語のことはAに聞くようにと言う。また、ある先生も、新しく来た留学生に対して、「Aさんは日本語が上手だから、何かあったらAさんに話さない。」と言った。自分も日本語はよく分からないが、多分こういうことだろうと言ってあげる。外国人の友人が他の人と話したい時にも手伝ってあげた。

3-2-2. 事務手続き

大学での事務手続きは、住所や名前など、書くことはだいたい同じで、それはもう覚えた。それ以外のものは誰かに読んでもらって書く。間違っただけではいけない大切なものは誰かに書いてもらう。たとえば市役所に出すものは留学生係の人に書いてもらった。その留学生係の人はとても親切で、英語話者とは英語も話す。もっとも、自分は英語は話さないで、その人とも日本語で話しているが。事務手続きはいつもみんなが手伝ってくれるので、問題ない。

3-2-3. 医療関係

修士課程の試験を受けた時に健康診断もあって、緊張した。用語が分からないし、痛みを表す言葉なども「がんがん」というのがどういう痛みか、母語で言うものと同じかどうか、といったことが分からない。自分は病気ではないからいいが、もし病気になって、説明がうまく伝わらなければ死んでしまうこともあると思う。どうしても困る時には通訳を雇うこともできるだろう。

3-2-4. コミュニケーションでの問題

小さなことでは、買い物で漢字が読めなくて間違ってしまうというようなこともあるが、周りの人に聞くので問題はない。

3-2-5. 相談する人

文化や習慣の違いをよく分かってくれる人がいる。

4. 考 察

この学習者に対するインタビュー結果から一般的な傾向を導き出すことはできないが、コミュニケーションに特に支障のない、非漢字圏の中級レベルの日本語学習者の例として、特徴や問題点を記述することができるだろう。

まず、Aは日本語のレポート等の提出を義務づけられていないが、自分から提出しようと努力し、積極的に日本語を使っている。また、学習のために様々なストラテジーを使っており、このような積極性が学習の成功に結びついているのであろうことは想像に難くない。さらに、他の外国人のために通訳するというような他者に対する援助をしており、そのことは、自己の日本語能力についての自己評価を高めることにつながっているであろうと考えられる。Aは、成功している学習者の例であると言える。

一方、専門の学習や研究の場面では、日本語能力の不足を感じており、自分のやりたいこととできることの差の中で、目標を修正しながら学習を進めている。「日常会話ならできるが、専門用語はあまり分からないから、授業の時に分からないことは多い」といったコメントがあるように、日常会話と専門領域での日本語での理解度の差に困難を感じているようである。Aは現在も、講義は50%くらい分かる程度だと感じており、次年度からのレポートや論文を心配している。また、「先生や友人は自分のことを日本語が上手だという」と話している通り、日常生活における日本語能力が充分なだけに、専門領域での日本語能力の不足を周囲によく理解されていない可能性がある。今回の学習者Aのケースに留まらず、大学院での専門領域で使う言語が英語などでなく日本語の場合、専門領域の日本語能力の不足からくる困難に遭遇する可能性はかなり高いと思われる。専門領域の日本語については、今後も研究しつつ、研修コースにおいても学習者をサポートできるシステムを作っていく必要があるだろう。

講義の聞き取りでは、内容的には既知の事柄が含まれているはずの講義を50%くらいしか分からないと感じている。一方、同時期に信州大の研修コースを修了した漢字圏の学習者は、担当教官が専門の内容について話す場合はほぼ問題なく聞き取れるとしている。おそらく、漢字語彙の知識の差がこの違いを生んでいると推測される。Aも「全然知らないことについては、聞いても分かりにくい」と述べているように、未知の事柄を日本語で学ばなければならない学習者の場合には、それ以上の困難が生じることが想像される。

またAは、読むことでは漢字が大きな問題であるとしている。一番困っているのは読むことであると言い、漢字の難しさを訴えている。非漢字圏学習者のAにとっては、漢字が大きな問題として意識されていることが分かる。「中国人の留学生は最初はあまりできなかったが、漢字が分かるので、今では自分よりよく読めるようになった」というコメントのように、漢字ができないために、漢字圏の学習者に比べて「読む」活動において困難が多いことを訴えていた⁴⁾。非漢字圏から来たAとしては、漢字が大きな悩みとコンプレックスとなっていることが想像される。また、ハンドライティングや字が不鮮明なコピー、細かい活字など、様々な問題のために漢字の正確な形が分からず、辞書を引くことさえで

きない不便さも語られた。Aが漢字の問題として認識していることの中には、表記や語彙、語用の問題などいくつかの要素があるだろうが、漢字そのものの知識も不足しているものと思われる。

今まで見てきたように、Aは、非漢字圏から来た日本語研修コース修了生としては日本語能力の比較的高い学習者であるが、専門領域の日本語に関しては様々な困難を抱えており、漢字や語彙の知識の不足がその大きな要因となっていると考えられる。

上記のような例を考えると、日本語研修コースでは、非漢字圏から来て日本語で研修を受ける予定の学習者に対して、漢字と語彙の教育に力を入れるべきであろう。また、Aが実施しているように、自分で辞書を引くなど自律的学習ができる能力も養成していく必要がある⁹⁾。そして、漢字や語彙の学習・指導方法を様々な角度から考察し、非漢字圏学習者にとって学習しやすい体系的な漢字学習のシラバスを工夫していくことも有効と思われる(カイザー1997, 2000など)。専門領域に必要な漢字や語彙は学習者ごとに違う。漢字学習ではCAI教材などを活用した個別学習が効果的と考えられる。語彙に関しては、教師と学習者の1対1の学習時間であるチュートリアルなどを活用して、早い段階から専門への移行後を想定した語彙を日本語研修コースでも扱っていく工夫が必要である。また、ふりがなの有効性やハンドライティングの難しさなどについて、受入先の大学院に知ってもらう努力も必要と思われる。

Aは、日常生活では特に不便は感じておらず、人間関係も学習者の側から見ておおむね良好であった。小学校へ出かけて行ってボランティア活動をしたり、留学生係や教官から他の留学生をサポートすることが期待されるなど、幅広く日本人や外国人から信頼されていることがうかがわれる。一方、休みの過ごし方に関しては、一緒に遊びに行くのは日本人ではなく、その理由を「日本人は忙しいから」としている。このことについて日本人学生側は理由を同じように捉えているかどうかわからない。留学生との接触に対してためらいや不安がある場合も考えられる。留学生と日本人学生との関係については、今後、日本人学生の側がどのように認識しているかを調べる必要がある。また、留学生と日本人支援者および学生との、関わりの頻度や深さも研究の対象としていく必要があるだろう。

なおAは、トラブルについては「文化や習慣の違いをよく分かってくれる」協力者がいると語っており、トラブルがあった時にはサポートも得ている。

5. おわりに

今回の調査では、生活言語に特に支障のない中級学習者が、専門領域での日本語能力の不足により、学習や研究に困難を感じている例が明らかにされた。非漢字圏学習者は、漢字と語彙の知識の不足がより多くの困難をもたらしている可能性があり、日本語研修コースでは、このようなことに留意した教育をしていくことが大切だと思われる。

このインタビュー調査では、学習者が置かれた状況が、ある程度体験や意識に即した形で明らかになったが、これは一つの例に過ぎない。また、被調査者は教員研修生であった

が、修士課程への進学のために学部の授業に出席するなど、一般的な教員研修生とは異なった生活をしており、教員研修生に特有のニーズ等は、今回の調査では明らかにならなかった。教員研修生やその他の大学院進学予定の研究生が置かれている多様な状況は、今後、第二期以降の留学生に対するアンケートとインタビューによる調査によって明らかになっていくだろう。

また、今回は、留学生の側から見た状況だけが調査されたが、教官や日本人学生、留学生係など立場を異にする人には、同じ状況であっても異なった側面が見えているに違いない。また、留学生自身も時の流れにしたがって成長していくはずである。それらを含めた、より総合的な状況の把握が、今後の課題である。

注

- 1) 今回のインタビューでは、学習者が現在置かれている状況以外にも、日本語研修コース当時を振り返ってもらい質問も併せて行っており、実際には2～2.5時間のインタビューが実施された。
- 2) 質問項目は、稿末の参考資料を参照されたい。
- 3) インタビューの途中で、Aがボランティアをしている小学校の先生からAの携帯電話に連絡の電話がかかった。Aの電話での受け答えは、イントネーションが日本語母語話者に似ており、自然な感じで、このような電話にはよく慣れているように聞こえた。最後は「じゃ、よろしくお願ひします。はい、どうも。失礼します。」と言って電話を切った。
- 4) 専門領域の学習での漢字の読み方が分からないことによる困難は、守山他（2000）でも報告されている。
- 5) 非漢字圏学習者の漢字学習ストラテジーは、加納（1998）等で研究されており、漢字と語彙の学習ストラテジーについては横須賀（1999）にまとめられている。

参考文献

- 加納千恵子 1998 「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」
『日本語教育論文集-小出詞子先生退官記念』凡人社
- 佐藤 尚子 1999 「千葉大学日本語研修コース修了生調査報告1」
『千葉大学留学生センター紀要』第5号
- 広島大学留学生センター 1993 『日本語研修コース修了生実態調査報告書』
- 守山恵子・永井智香子・松本久美子 2000
「留学生の求めていること ―研修コース修了生インタビュー調査報告―」
『長崎大学留学生センター紀要』第8号
- 横須賀柳子 1999 「語彙及び漢字学習ストラテジーの研究」宮崎里司、J.V.ネウストブニー編
『日本語教育と日本語学習 ―学習ストラテジー論にむけて―』くろしお出版
- カイザー・シュテファン 1997 「漢字学習者各アプローチの検討(1) ―表音的アプローチについて―」
『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』第12号
- カイザー・シュテファン 2000
「非漢字圏日本語学習者のための漢字・語彙教育のシラバスに関する考察

参考資料

[質問項目]

大学での勉強や、まわりの人との関係、生活のことについて、お聞きします。まず、勉強について教えてください。

- 1-1 講義やゼミなどの授業を受けていますか。それは、講義ですか。ゼミですか。その講義/ゼミの中では、どんなことをしていますか。
- 1-2 そこでは全部日本人学生と同じことをしていますか。日本人学生と同じことをしなくてもいい場合は、具体的に教えてください。
- 1-3 授業やゼミの、先生や学生の話の聞き取りはどうですか。
- 1-4 日本語の論文・レポートを読みますか。困っていることがありますか。
- 1-5 日本語で論文・レポートを書きますか。困っていることがありますか。
- 1-6 発表は日本語でしますか。今までの発表は、どうでしたか。
- 1-7 授業などで使う日本語以外に、日本語の学習は続けていますか。

- 2-1 まわりの人とのコミュニケーションは、すべて日本語ですか。うまくいっていますか。
(自分でここを変えたほうが良いと思うこと、指導教官に変えてほしいことがありますか。)
・指導教官と ・日本人学生と ・留学生と ・他の日本人と
- 2-2 事務手続きは、すべて日本語ですか。困っていることがありますか。
・大学の中で ・大学以外で
- 2-3 医者にかかった時、話す言葉は日本語ですか。困っていることがありますか。
- 2-4 今までに、まわりの人とのコミュニケーションや生活の面などでどんなトラブルがありましたか。
- 2-5 トラブルの時、あなたはどうしますか。相談する人はいますか。

- 3 その他、今の生活や勉強について話したいことがあったら、どうぞ。